

わたしの聖戦

女性が働くということ

医学ジャーナリスト・医学博士 植田美津恵

連 209 載

人類の歴史は感染症に 始まり感染症に終わる

このタイトルは、私が「公衆衛生学」の講義をする際、常に学生に伝えていることだ。

がんなどの生活習慣病や認知症など、トレンドな病気に目がいきがちだが、病気の歴史や公衆衛生学を学ぶと、それらの病気は人類の歴史上、ごく最近台頭してきたものであつて、長いスパンで見れば、私たちにとっては感染症こそが最強の敵であることが理解できる。感染症、少し前までは伝染病といっていたが、法律の名称が変わったことで、いまではほとんどを感染症と呼んでいる。人から人へうつる感染症でもっとも身近なもの

は、風邪だろうか。多くの風邪は多種多様のウイルスが原因となる。たいていは、睡眠と栄養を取ることによって自然治癒する。風邪薬の種類はごまんとあり、薬局へ行っても迷うほどだが、しかし風邪を治す薬は存在しない。咳や鼻水を抑えたり熱を下げたりする薬剤はあつても、風邪のウイルスそのものを殺す薬は存在しないからだ。風邪を引いたからといって病院に行くのは、ほとんどが無駄。ゆっくり休養するのがベストである。そうはいっても多くの人は病院へ行き、混雑する待合室で長い時間座って順番を待つ。病院へ行っただけで安心

する人が多いため、おかしなことだが、その行為自体がひとつの治療となつているのかもしれない。かつて日本で恐れられた感染症に、結核がある。つい最近まで、結核は死亡原因第一位であり、国民病とも呼ばれ、多くの若い人の命を奪つてい



た。鳥取の青谷というところで、結核菌に冒された脊椎を見ることができた。なんと弥生時代の人骨だという。私も実際に目で見たことがあるが、菌が背骨に侵入し脊椎の変形をもたらしているのを見て、無機質な人骨を不思議な面持ちで見つめ

た覚えがある。その骨が弥生時代のものであること、縄文時代にはそのような人骨が発見されていないこと、弥生人は大陸から日本に渡つてきたこと、などから、結核は弥生時代に大陸から日本に輸入されたといふのが現在の定説である。だが本当のところはわからない。

感染症と人類との付き合いは長いのに、感染症の原因とされる細菌やウイルスが発見されたのは19世紀のこと。それまで、病原体の存在が未知であつたことを思うと、いかに人々が幾多の感染症と四苦八苦しなから闘つてきたかが伺える。歴史学者の磯田道史氏によれば、明治維新あたりに新政府がパンデミック（世界的大流行）に直面した様子が文書として残されているという。その対策として、まずは一斉掃除。次いで、手洗い・うがいを推奨し、換

気の必要性も説いている。ここまでは現在と同じだが、さらに明治政府は、国民に抵抗力をつけるために喫煙と性行為を控えることを奨励した。

喫煙はわかる。喫煙は免疫力を低下させるためだ。では、性行為は？ 恐らく体力を消耗することとで免疫力が落ちることが危惧したのであろうが、残念ながらこちらはきちんとした証拠はない。このような国家によるお触れは、平時には笑い話だが、いざ感染症が流行すると、とても対岸の火事では済まなくなる。

いまだに、ウイルスに對抗する術がないことを改めて知ると、医学は本当に進歩したのかどうか疑いたくなる。医学の進歩は、私たちの錯覚であつて、本当のところは何もわかっていないのかもしれない。実のところ、それこそが恐怖である。

イラスト・伊藤香澄